【研究ノート】

初期のノサック(1)

――『没落』について――

今村　孝

ハンス・エーリヒ・ノサック Hans Erich Nossack は一九〇一年一月コーヒー輸入商社を営む父の子としてハンブルクに生まれた。子供のころアイス・スケートで足に負傷し、歩行にそのあとをとどめているという。十代のなかばから日記、戯曲、抒情詩、散文作品などを書きはじめる。人文系高等学校をおえたあと、イエナ大学で哲学と法律学とを学んだが、中退して工場労働者、会社員など種々の職業についた。左翼運動にも関係し、二十代のなかばにレーニン劇を書いたという。一九三三年ヒットラーの政権掌握とともに、作品の公刊経歴のない彼も発表を禁止された。同年、父の商社に入る。一九四三年、ハンブルク大空襲の火中にそれまで書きためた原稿を失った。戦後、父の商社の経営を引き継ぐかたわら、雑誌に詩などを発表。一九四七年に『詩集』、『死者へのたむけ――生き残った者の報告』(小説)を、翌四八年に『死とのインタビュー』(短篇集)を公刊。フランスでサルトルの主宰する『現代』誌に紹介され一躍有名になる。一九五六年以後、作家活動に専念。一九六一年、ビューヒナー賞を受賞。

おもな作品は右記のほか、『遅くとも十一月には』(小説、五五年)、『螺旋』(短篇集、五六年)、『弟』(小説、五八年)、『最後の叛乱のあと』(小説、六一年)、『控えの間の出会い』(短篇集、六三年)、『わかってるわ』(小説、六四年)、『文学の弱い立場』(評論集、六六年)、『ダルテス事件』(小説、六八年)、『知られざる勝利者に』(小説、六九年)。

一九四三年七月末から八月初めにかけて、イギリス空軍は、死者約七万といわれる当時史上最大の無差別大量

爆撃をハンブルクにくわえた。ノサックはこの体験を三カ月後に『没落』に書いた。彼は作家活動を開始しようとしたその当初からナチスに発表を禁止され、そしてこの大空襲の火中に書きためた原稿のほとんどすべてを失った。したがって『没落』はわれわれの知る戦後作家ノサックの第一作であり、また以後のノサック文学の原型ともみられている作品である（一九四八年に短篇集『死とのインタビュー』に収録して発表）。

それによるとノサックは、たまたま休暇をとってミージー（妻？）とともにハンブルクを離れ、十五キロ北方にハンブルクを見おろすリューネブルク荒地北端の村ホルストのはずれでこの大空襲をむかえた。市中で直接被爆した人々のほとんどが、燃える家屋から戸外に逃れ出たとき、市全体が火の海であるのをまったく知らず、それがおそらく彼らの救いであったのにたいし、ノサックにとってハンブルクは「全体として没落し」、彼の「危険は眺め知りつつこの運命全体を甘受し、それにうちのめされることにあった」。ノサックはこの報告を委託されているという気持から、これを片づけることなしには彼の口は永遠に閉じられたままでいるだろうという気持から、『没落』を書いた。

邦訳すればおそらく四百字詰百数十枚の分量になるこの作品は、一行の行間をへだてた三部分から構成されている。最初の部分はみじかい序章であって、いま簡単に紹介した執筆の経緯と、休暇地ホルストの自然などが語られる。つづくいわば本篇の前半部には、ホルストでの空襲体験がその第一夜を中心に語られ、ついで避難してきた被災者たちと村人たちとの心理的齟齬が書きとめられる。後半部には、被災者たちの心情、ハンブルクの廃墟の情況、そこに生活を再開する市民たちの心境などが描かれている。

わずか三カ月後に書かれたせいだろうか、『没落』には名辞や文章の意味が一義的に定まらないところがあって、未整理な印象をあたえるようでもあるが、それがまた作品の幅ともなっている。たとえば失われた過去は、序章ではいつかそこに帰らねばならぬ過去であり、前半部ではその喪失が解放につながる呪わしい過去である。しかも後半部では過去という語は避けられながら、失われたものはおおむね哀惜の方向でとらえられる。また序章のなかの「あのとき起こったことを現実としてとらえ記憶のなかに整理しておさめこむことは、理性にはいつまでたってもできないことだろうから、私はそれが悪夢のようにしだいに消えてゆくのを怖れる」という文章にしても、あのとき起こったこととは理性にはとても現実

として容認しえない大惨劇だったというほどの意味かと、多少の腑におちなさを残しながら読みすすめると、そうではなくていわば外理性的世界の出現というノサックの内的体験をさしているのではないか、という疑いが生じてくる。

『没落』に事件の報告と体験の報告とが混在するのは当然だろう。しかしノサックにおいてその両者は背馳しあい、たがいに峻別されねばならぬ性質のものであり、以後ノサック文学はその本質において事件の報告と峻別される体験の報告としてなりたつだろう。「この手記は（公的記録とは）いわば別の言語で書かれている。それらはたがいにまったくなんの関係もない別の事柄を扱っているのだと、人々はまさしくそう思うかもしれない。それほど事件と体験とはあいいれないものだ」[1]（『最後の叛乱のあと』六一年）。それにしても事件と体験とが背馳するのはなぜか。ノサックの作品の主人公ないし報告者がわれわれの現実とは異なる体験世界に住むからであり、そのいまひとつの現実ないし非現実への移住こそ、『没落』における体験の報告に被災者たるわれわれの意識の変化としてとらえられているのである。『没落』がノサック文学の原型とされるゆえんである。ところで、『没落』では、背馳しあうはずの事件と体験とがうまく分化せず無媒介に癒着しているところがあって、一読目にはこれをうまくはがしながら読むことがむつかしい。しかし読みおえたあとでは、少なくとも再読すれば、一、二の細部をのぞいてむしろよくわかる作品である。にもかかわらず、たとえばライヒ＝ラニッキの次のような不用意な（と私には思われる）見解が一般的なのはどうしたことだろうか。

「しかしノサックは、過去の完全な喪失と思われたものを大きなチャンスとしてとらえた。一九四三年は彼の出発の年（ヌル・ヤール）となった。『没落』に、はっきりと次のように書かれている。『われわれが得たもの、変ってしまったもの、それはわれわれが現在的（gegenwärtig あえてこう訳しておく）になったということなのだ』破局が彼をつまり現代作家（Gegenwartsdichter 文脈からして現在を直視する作家というほどの意味だろう）にしたのである。そしてそれは当時、破局の作家になることを意味した。……『没落』の成立後二十年間ノサックの生感情は原則的に変わっていない――ヴァリエイションやひょっとして変種はあるが変化はないだろう。彼の小説や物語には破局がとりあげられ、それが筋の出発点となり軸となっている。もちろん、ノサックのさまざまな幻想を一九四三年の事件に共通の根源をもつ強迫観念だとする推

測ほどあやまったものはないだろう。それらの幻想はわれわれの時代にその根源をもつのだ。いいかえれば、大洪水によって『現在的になった』作家は、つづく時代の情況によって破局の作家でありつづけることを強いられているのである[2]」

この推論は媒名辞の曖昧つまり四個名辞の誤謬のうえになりたっている、と私は思う。ちなみにノサックはのちに永井隆がその娘の原爆体験を書きとめた文章にふれて「事実よりも、むしろ事件が人間にもたらす魂の崩壊があつかわれている[3]」と指摘するが、『没落』における彼の関心もたしかに人間の意識の変化にあった。しかし「われわれは現在的になった」というのは、けっして現在を直視することを意味しない。この語彙だけをとりだせばほとんど無意味概念であり、どんな解釈も許されるのかもしれないが、ノサックはこの文章に「われわれは時間から離脱した」とつづけ、さらに童話的イメージに転じて説明をあたえているのだし、それになによりも『没落』全篇がこれを定義しているといっても過言ではないのである。あらゆる出来事やエピソードがその根底においてこの一点に収斂しているのは、以下にみるとおりである。

付言するなら、破局の継続といういいかたも正鵠をいていない。ノサックは時代の破局のなかに過去からの解放を、抑圧的文明からの離脱をみたはずである。やがて破局の時代はおわる。過去が修復したのだ。続いているのは、いや復旧したのは、破局でなくて常態の抑圧の現実のはずであり、ノサックの作品に破局が描かれるとしてもそれは抑圧的現実の繁栄のなかでの個人の破滅であり時代そのものの破局とは異質のものである。ノサックが時代を直視するというのは、「現在的になった」ということとは別に、そのとおりだと思う。まさにそれゆえにこそわれわれはかえって時代の変化を変化としてみとめ、そこに、それだけが原因でないにしろ、ノサック文学の種差をみないでは作品を定義ないし理解したことにはならないだろう（ただし、今回はそれには触れえない）。

ライヒ＝ラニッキは『没落』における体験の報告と事件の報告とを混同している。ノサックはたしかに現実を凝視している。しかし現実のなかに、あるいは背後に、いまひとつの現実を体験する。初期の作品でいえば、抑圧の理性的現実の破綻のなかに、かえって抑圧から自由ないまひとつの現実ないし幻想世界を体験する。そこには事件の報告と体験の報告との複眼的構造があるといえる。しかしノサック文学をノサック文学たらしめるもの

はむろん後者にあり、そしてその幻想的体験世界の根拠は『没落』に明白だと思われるので、少し長くなるが、以下に『没落』のほぼ全貌を紹介しておこうと思う。

冒頭の執筆の経緯はすでに述べた。それにつづくホルストの自然。――最初の二日は頭痛のうちにすぎた。荒野の空気になれるまではいつもこうだ。ことし最初の夏らしい天気だった。ひろびろとした荒野にはヒースのあいだに名を知らぬもう一種の植物が生い茂り、それがいま一面に花をつけて薔薇色のもやが漂っているかのようだ。「私たちは荒野を愛する。私たちはなんらかのかたちで荒野の住人なのだ。おそらく大昔にそこで生まれたのだろう。他の人々は荒野では体に変調をきたし、憂鬱になる。彼らは時間なしには生きられない。荒野には時間がないのだ。彼らは私たちが童話から生まれたものであり、ふたたび童話になるのを知ろうとしない。私たちは戦争を忘れはじめていた」――自然の環境描写の大半は割愛したが、ノサックがこれを詳細に記すのは、空襲をむかえる地理的気象的条件を説明しておく必要、夜間空襲の壮絶さの対比的効果ということもあるだろうが、なによりも彼が無時間の荒野に帰属する人間であることを記しておきたかったからだろうと思われる。そしてまた序章はこう結ばれる。「深淵のむこう側のこの牧歌をこんなにも詳しく描写したのは、ひょっとするといつかそこから、失われた過去へ帰る道が見つけられるかもしれないからだ」

前半部は破局の第一夜の夜間空襲にはじまる。――四日目の土曜日の真夜中ごろ騒音を聞いて外にとび出すと、鮮明な星空と暗黒の大地のあいだをおもしのようにのしかかる爆音が蔽っていた。二百回にのぼるそれ以前の空襲とはまったく様相を異にし、私は終焉を直覚する。サーチライトが夜空をなでる。一様に持続する爆音、それに入りまじる急降下の轟音、爆弾の落下音。近くの高射砲陣地の射撃、落下する破片のうなり。夜間爆撃は四夜くりかえされ、私は北方に視界のひらけた畦道を行きつ戻りつ、ハンブルク上空の無数の照明弾と下から赤々と照らされながら刻々増大する火災の煙とを眺めた。「目に見えるものは少なく、そしていつも同じだった。目に見えるものはまた一番重要なものではない」

突然、近くの探照燈の光が地面を這ったとき「自然さえもが憎悪にかられて自然自身に蜂起しているのを私は見た」。幹のうつろな二本の松の木が黒い狼に変身し、血のしたたる弦月に跳びかかっていたのだ。私はこの憎悪を、この憎悪が炸裂する日が到来するのを知らなかっ

ただろうか。この日の到来を待望していなかったか。時代のさまざまな事件がノアの洪水を考えさせた。それは過去を見棄てることを意味しなかったか。あすの大洪水のあとに生き残る者たちのために、生命をかけて守るべきものがどこにあっただろうか。「私たちが使用し私たちを圧し潰すあらゆる事物の、どれがまだ私たちのものだっただろうか」。しかしいま私はこの憎悪から解放されていた。私は破壊された世界の岸辺をよろめき歩き、そして呻いた。「審判」は一時半ごろ終わった。

あくる日曜日、村に出かけてみると、避難民がもうその夜のうちから運ばれてきていた。村人たちの援助は予期以上だった。しかし一週間のうちに事態は一変した。そねまれているという村人たちの気持が被災者の心にそねみの火をつけ、信じられないことだが、逆に被災者たちが手にしたわずかな支給品を村人たちがそねむという事態さえ生じた。しかしほんとうのところは、彼らはわれわれ（私もまた自分の住居の破壊焼失を聞き知ったときから避難民の一人となった）がすでに「無への跳躍」をすませたことをそねんでいたのだ。けっきょくのところ、被災者と非被災者との行き違いは、双方がありえないことを期待しあっていたことに原因があった。非被災者たちは、想像を絶する悲惨を経験したはずの被災者たちに、嘆きを、少なくともおし隠された涙を予期していた。しかし被災者は非被災者の持物にうろんなまなざしを向ける。「いったいなんのためにまだこんなものを持っているのか」。一方われわれは「だれかがわれわれに呼びかけてくれるのを期待していた。起きろ、それは悪夢にすぎない……そしてどうしてだれかがわれわれの目をさますことができただろうか」。「こうしておなじ屋根のしたに一緒に生活しおなじテーブルについている人々が、まったく異なる世界の空気を呼吸しているという事態が生じた。……人々はおなじ言語を話しながらまったく別の現実のことをいっていた」

「あるいは童話の薄明のなかで語るほうがよくわかるだろうか。昔ひとりの人間がいました。彼は母親から生まれたのではありませんでした。拳が彼を素裸のままこの世に押し出したのです。するとある声が叫びました。見よ、どうしてやっていくのか。彼は目をあけました。しかし彼は彼をとりまく四囲とどのようにかかわったらいいのかわかりませんでした。彼はうしろを振り向きもしませんでした。うしろには火しかなかったのです。／われわれはもはや過去をもたない。過去をもちそこに明日の規矩を求める人々がまだいるのでなければ、われわれは過去の喪失をけっしてそんなに苦痛に感じはしない

だろう。彼らはわれわれより強い者に思える。われわれはおそらく彼らに従わねばならない。だが、彼らの目的をわれわれの目的とする努力のなんと無駄なことだろう。こうして世界は二分された。そのあいだには目に見えぬ深淵が横たわっている。双方がそれを知っている。双方がたがいを憎みはじめた」

後半部は、火曜日になって私たちの住居のあった建物も破壊焼失したことを聞き知るところからはじまり、量的には全体の三分の二ちかくをしめる。――すぐにもわが家の跡に行ってみたい気持にかられる。しかしあらたに空襲があったり、悪疫の発生とか救援作業に徴用されて帰れなくなるなどの流言蜚語もあり、さなくとも運命をわが目で確認することへの怯懦から、それは一日延ばしに延ばされる。だが思いはすぐにそこに落ちこむ。先日修理したなんのへんてつもない椅子等々……。被災者たちは少なくとも被災当初は、失ったものの金銭的価値を惜しんではいなかった。われわれの哀惜は、変色した写真や子供のころの古ぼけた人形などの補いえないものにあった。

やがて炊事や洗濯などの身辺の仕事に手をそめるものもあったが、そんな人たちもふいに手をとめて人溜りに集まってくる。「われわれはありあまる時間をもっていたのではない……。われわれは時間を抜け出していたのだ」。「しかし当時の人間の顔、それをだれが忘れられよう。……大きく開かれた目をとおしてなんの妨げもなく人間の背後の無限が人間のまえの無限なるものに吹き入り、その顔はきよめられて永遠なるものの通路となっていた。この顔を……われわれの最後の可能性の思い出のために星座にして空に投げかけておこう。むろんこの無意志状態を病気とみなす日がやってきた」

偶然新聞を手にしても戦局には目もくれず、われわれのための公示しか読まなかった。「われわれの運命は完成されたのであり、残りの世界の出来事によってもはや変えられるはずもなかった」。われわれは権力とか国家とか呼ばれるものに、ハンブルクの運命の責任があるとも事態を変えうる能力があるとも思わなかった。「それは人間がもはや諸制度の奴隷でない瞬間だった」。「敵もせいぜい、われわれを滅ぼそうと願うわれわれの知りえぬ力の道具にすぎなかった」

土曜日になってようやくハンブルクに向かう。のどかな田園地帯を死の街に向かって疾駆するトラックの荷台のうえで、私はある解放感におそわれる。「ついにほんとうの生活がはじまる」。逸すべからざる私の最後の大きなチャンス。それは、より高次の力に破砕されてもう

妥協の生活の必要がなくなったというようなことを越えて「準備のおそろしい荒野がついに踏破された」ことを意味するのだろうか。「この気持のなんと事実と矛盾することだろう。それともこう解さなければならないのだろうか。たったいま死んだばかりの人が最後の微笑をうかべるのは、これに似た気持を感ずるからなのだ、と」

ハンブルクに近づくにつれて破壊が目だちはじめる。私は筆をとめて問わねばならない。人々がただ無気味なものを楽しむためにこれを読むとすれば……。そのために大洪水が、冥界行が必要なのか。「それともこれは、われわれがもはや人々の期待するようなものではなくなったことの、もはやここにいるものでは、自明なものではなくなったことの寛恕の願いなのか」——

このふたつの問いに『没落』の二面性が、すなわち事件の報告と体験の報告とのふたつのモチーフが端的に示されている。以下、廃墟の報告はかなりの頁数にわたるのだがごく簡単に記しておく。——ハンブルクは沈黙の平坦地、巨大な墓地に変貌していた。崩れ落ちたかずかずの教会の塔、パゴダと化した市庁舎。囚人による屍体処理、火炎放射器によるその焼却。焼け焦げた臭いと腐乱臭のただよう瓦礫の街に跳梁するハエ、ウジ、やがてネズミ。半壊の私たちの事務所から若干の荷物を袋と古毛布につつんで持ち出す。急になにもかも貴重なものに思えてくる。そのとき持ち出せなかったものは、そのあとすぐに盗まれた。わが家の廃墟に立ったときは、つらいというより、不可解な気持だった。だが偶然両隣と向かいの建物が破壊を免れているのを見ると、不運を嘆かずにはおられない……。せめて衣類と思い出の品だけでも持ち出したかった……。

焼け出されなかった人々の持物を見るにつけ、私たちも持っていた、という思いにかられる。妻や子を失ったのにくらべれば、といわれてみてもどうにもならない。「私たちはそれらのものをけっして所有していたのではなかった。……私たちをとりまくすべてのものは私たちの客人だった」。「それらは私たちを護りつつ滅びた。そしていま私たちはまやかしの避難所もなく素裸で立っている。……忘却するか告白するか、第三の道はない。／忘却！　残された幾人かがこの世の素裸の大地に横たわっていた。……夜だった。一人の男が寝言をいった。……みんなたいへん不安になり立ちあがった。……彼らは眠っている男を足で突いた。彼は目をさましていった。『私は夢を見ていた。私は夢に見たことを告白せずにはおられない。私は私たちの背後にあるもののところにいた』。彼は歌をうたった。炊き火は蒼ざめた。女たちは

泣きはじめた。『私は告白する。私たちは人間だった！』これを聞いたとき男たちは話しあった。『彼が夢に見たとおりなら、おれたちは凍え死ぬだろう。彼を殴り殺そう！』彼らはその男を殴り殺した。するとふたたび炊きびの火が彼らを暖め、すべては平穏だった」

やがて市民は続々と焼け跡に帰りはじめた。住む場所と日用品とが探し求められた。人々はつとめて以前とおなじ生活をしているようにふるまったが、それが「仮象にすぎないのを知っていた。その存在を信じていなかった」。ものはごくわずかしかいらない、逃げだしにくくなるから。夕暮になるとだれもがそういった。すべてはまだ序の口で、飢餓や悪疫におそわれて生き残れるのは四人に一人だともいわれた。その後多くの都市が破壊され、まだ破壊を免れている都市もその時をおびえ待っている。ハンブルクの運命はもはやものの数ではない。

「だがハンブルクの運命がもはやものの数ではないのは、それをすでに経験したわれわれでなくて、かえってまだ深淵をまえにしてそれを乗り越える自信をもてないでいる人々こそ同情にあたいするからなのだろうか。われわれも深淵の向こうではそうだったように、彼らは昨日と明日とのあいだに締めつけられて一秒の現在ももたずに考えるために、深淵を乗りこえる自信がもてないのだ。つまり、われわれが得たもの、変わってしまったもの、それはわれわれが現在的になったということなのだ。われわれは時間から離脱した。彼女(時間、女性名詞)はまだぼくらを見張っている。彼女はぼくらに仕事するように命令し、昼食ですよとぼくらを呼ぶ。ぼくらは彼女のいうことをきく。ときどき彼女の呼び声を聞きのがす。……お前たちはいつもあのよその男と一緒にいてはいけません……と時間はいう。ああ、お母さん、いったいどうしてなの。あの人はぼくらの友達なの。いつもあの人に、おじさんの住んでるところに連れてってと頼むの。……ぼくらはふたたび通りに走り出て、死(男性名詞)と遊んでいる。すると時間は部屋の片隅に坐りこんで、自分が役に立たないものに思えるのだ」――

そのあとにただちにこう続く。「われわれはもっとも困難な事態をすでに経験した。もっと困難な事態といっても、ものの数ではないのだ。たいしたことではない。私はこの言葉をある人から聞いた」。ある人はこう語ったのだ。一人の男が地下室にやってきて、いまにも建物が崩れ落ちるからすぐそこを出るようにいった。大半の者はそこを安全だと思って出ようとせず、けっきょくそこで死んだ。袋小路のまえには焔が波うっていた。その男は、私がここまで来れたんだから、たいしたことでは

ない、といった。ぼくら数人の者が濡れた毛布を頭にかぶって袋小路を通り抜け、火のなかに出ていった。通りに出てから倒れるものもあった。ぼくらは彼らにかまっていられなかった。

末尾の童話と挿話とは、それぞれ体験の報告と事件の報告とにかかわる結語とみなしうる。ここではおもに前者についてみてゆくと、時間に重ねられる母親のイメージは現実原則の支配する世界を、よそものと呼ばれ死と呼ばれる男は快楽原則の支配する世界を代表するということができるだろう。それは過去に明日の規矩を求める者たちの世界と過去を喪失しつまり現在的になった者たちの世界、まだ深淵をまえにしている彼ら非被災者たちの世界とすでに深淵を越えたわれわれ被災者たちの世界に対応する。そして彼らがわれわれよりも強い者に思え、われわれが彼らの命令に従わなければならないのは、われわれの住む世界が非現実だからであり、われわれは非現実に住みつつなお彼らの現実世界に生体を保たねばならないからであろう。抑圧の現実と抑圧から自由な非現実。フロイトにおいてそうであるように、ノサックにおいてもそれらがほぼ意識と無意識に対応することは『没落』をも収録した短篇集『死とのインタビュー』の諸作品を考察するときにより明らかになるはずだが、いまは考察を『没落』と、そこにあらわなノサック文学の基本的性格とにしぼり、それらの諸作品および同時期の『死者へのたむけ――生き残った者の報告』にはこれとの関連においてのみ言及するにとどめたい。

ノサックは夜間空襲を描きながら、破局の到来を待望していた心中をうちあけていた。その心理は、すでにわれわれのものでない事物を、過去を見棄てることを意味した。大空襲による過去の剝離は解放につながる……。村人の持物にむける被災者の放心したうろんなまなざし、その無意志状態。われわれもまたそれを、たとえば大田洋子が無欲顔貌と形容した被爆者たちの自失状態として知っている。だがノサックの体験はこれを一歩も二歩も突き抜けたところにある。無への跳躍、時間からの離脱。だからその解放感も、たとえばレマルクの『愛する時と死する時』の空襲場面でのエリーザベトが語る重荷となり彼女を圧し潰すだけの過去の清算、新たな生活への出発の期待とは地平を異にし、人が死の世界に突入した瞬間に微笑とともにおぼえるような解放感だとされる。

被災者たちは深淵のかなたに、無、無時間、死と呼ばれる世界に跳躍した。それは抑圧の現実から無抑圧の非

現実への移住を意味するだろう。それが過去を喪失し現在的になったということの内実なのだ。ノサックは時間から離脱した人々のその無意志状態、その放心した、いや聖化された顔貌に人間の最後の可能性をみる。それは抑圧から自由な現実をきずくためには、抑圧の現実からいったん無抑圧の非現実に転出しそこから現実へ還帰するほかはない、ということを意味するだろう。序章において、無時間の荒野の牧歌から過去へ帰る道が見つけられるかもしれぬと書かれていたのも同じことだ。ノサックにとって過去は現実を意味する。それが二様に使いわけられているわけである。われわれが見棄てそして剝離された過去は抑圧の現実だった。しかしわれわれが帰ってゆくべき過去は抑圧から自由な現実でなければならない。(『死者へのたむけ』はまさにこのような帰り道をさまざまな夢の連鎖で探る作品であり、その末尾は「見よ、いまぼくらはひとつの過去をもつ」という叫びをもふくむ現実への還帰の予感に結ばれている)。

『没落』においては序章の一例をのぞいて過去はすべて抑圧の現実を意味する。どんなに大仰にきこえようとも、それは人類の抑圧的文明史の総体を意味する。だからこそノサックは、過去の喪失を、あの四囲の環境とかかわるすべを知らぬ素裸の男の童話的イメージで語るのだ。ここに快楽原則に支配される無意識のみが唯一の心的過程だった発展段階に退行した人間の姿をみることもできる。いいかえれば、現実原則の確立以前、現実のなかに有用なものと有害なものとを区別する理性の発達以前、思考する意識主体以前、要するに現実に適応するすべを知る以前の人間のイメージをみることができるだろう。[4] ノサックはこの地点にたちかえって人類の文明に仮借ない猜疑の目をむける。「生産するためには破壊しなければならぬ、というのは男らしい。しかし大地がこういうとしたらどうだろう。おれは大地以上のものになろうとしてお前たちを生んだ。しかしいまお前たちの行為はどこにあるのか。……私たちは直立だの生産だのいわないでおこう」

抑圧の文明の拒否、それは随所にさまざまなかたちであらわれている。プラトンの『プロタゴラス』によるなら、人間は他の動物たちの備える武器や毛皮などのかわりにプロメーテウスに火と技術とをあたえられ、のちにゼウスに国家社会をなすための政治技術をあたえられた。それが人類の文明なのだろうが、ノサックは、被災後に人々のみせた軽蔑以上の国家にたいする蔑視はなかったと書いていた。そしてまた、燃えるように暑い七月の末にわれわれは冬を怖れ、衣類と堅牢な履物だけが

「生きるために唯一必要なもの」であるのを知ったと書いている。これがハンブルクの寒冷の冬を怖れる被災者たちの実感だったことは想像にかたくない。しかしそれだけが唯一必要なものといういいかたには、動物には生得の毛皮と蹄に相当する衣服と靴とをのぞく人類の全文明にたいするトータルな拒否の姿勢が感じられはしないだろうか。

いずれにしろノサックには、人間から文明を剝離し、人間をいったんいわば動物から区別される以前の段階にひき戻したところから眺めかえそうとする、あるいは歩みなおそうとする視座がある。いいかえれば、人類の歩んでしまったあやまった文明史、抑圧の文明史を全的に拒絶する姿勢がある。『遅くとも十一月には』(五五年)のなかで作家メンケンが、自著に献辞にかえて記入する詩行

世界が創造されたとき、私はそこにいあわせた。
意向どおりにいかなかった点もある、というのが真相だ。
だがしかし……
そしてこれを記入するまえに思い浮かべる
おお、母よ、どうしてぼくらは動物ではないのでしょう！

という詩行に、[5] この視座がもっとも端的に語られている。短篇集『死とのインタビュー』についていえば、巻頭の『見知らぬ生物の人間についての報告』は、題名の示すとおり他の星からやってきた生物の目をとおして人間の姿をとらえかえした小品である。そしてまた、あの現実原則以前の、いわば人間以前の素裸の人間像は、『海からきた少年』にも『アパシオナータ』にも出現し、そして『ドロテーア』がすでにそうだが、以後の作品の、「若い」という形容詞、「天使」という比喩に修飾される、抑圧から自由な世界に帰属する一連の主人公ないし登場人物につながっていく。

ノサックの作品を幻想ないし非現実世界たらしめるこのような視座と主人公の原像は、いいかえれば抑圧の現実をトータルに否定する偉大なる拒絶の姿勢は、しかしながらかならずしも『没落』に端を発するわけではない。なるほど『没落』にはこのような視座や原像の根拠となるいまひとつの現実ないし非現実の誕生が、ハンブルク大空襲を経験した人々の意識の変化として、世界の分裂

として描かれていた。しかしまたノサックは、すでにその序章のなかに、空襲体験とは因果関係なしに、われわれは無時間の荒野の住人であり、おそらく大昔にそこで生まれたのだと、彼らはわれわれが童話から生まれふたたび童話にかえるのを知ろうとしないと書いていた。抑圧の現実と抑圧から自由な非現実というふたつの世界の対立は、はじめからあったわけだ。そして後者による前者の全的否定こそ、われわれの知るノサック文学に一貫する姿勢であるのだが、これこそ十代のなかばにして彼がものを書きはじめ、そしていまも書きつづけなければならない根源的衝動だろうと推測される……。

『没落』のなかに焼失した彼の四半世紀にわたる日記について「日記というのはそもそも正しい表現でない。そこにはほとんど出来事は書きとめられておらず、出来事に触発された考えだけが書きとめられていた。いや考えでもなく、考えにいたる道程だった。そうだ、私が書きとめたのは思考の過程だった」と書かれている。この記述に、すでに日記において思考過程が出来事から乖離していた様子がうかがわれるのはなぜか。われわれはここにあの『没落』末尾の童話のイメージを、すなわち母親の命令に従いながらかえってそれを全否定し、死と呼ばれる男と遊ぶ子供の像を重ねて見ることができる。逆にいうなら、死と呼ばれる男といまひとつの現実ないし非現実に遊ぶことは、とりもなおさず現実のなかでの出来事あるいは自己の行為をトータルに否定して、想像の世界に思考を展開することを意味するであろう。

ノサックはのちに、作者からみれば作品はすべて日記だといい、そしてそのさい、作家は思考するのでなく反応する（拒絶の態度をもつという意味でもある）のだといっているが、[6] それは思考過程といわれた彼の日記に矛盾するというよりは、むしろその思考過程の性格をよく物語っているといえるだろう。いずれにせよ、すでに出来事から乖離していた日記の思考過程は、そのまま、事件の報告から峻別される体験の報告としてなりたつノサックの作品世界につながってゆく。思考と体験、それは少なくとも初期のノサックにとってほぼ同義なのだ。「体験はうちにその要素として思惟行為をふくむ」[7]（ディルタイ）ものだが、『死者のたむけ』に次のような表現がある。文中、それとは私の体験報告としてなりたつ作品世界そのもののことである。「それを思考することはできる、体験することはできる。しかしそれを言葉にするとすべての存在が不純になる」

ノサックの作品が、さまざまなヴァリエイションはあるにせよその根底において、抑圧の現実の全否定、抑圧

から自由ないまひとつの現実における思考過程ないし体験報告になりたつとするなら、その作品世界はわれわれの現実つまり理性的世界とは異なる地平にあるのだから、われわれの理性的言語で表現されるとき「すべてが不純になる」というわけなのだろう。ノサックはある機会に彼の作品の中心テーマを、人間の「境域の拡大」、「保険不可能なものへの出発」といい、それは「無と呼ばれながらけっして無ではない無」の世界のことだと語っている。そして「そのうえ私にはクリュタイムネーストラー・コンプレックスつまりアンティ・ムッター・コンプレックスがある。それは失われた過去に関係があるかもしれない」ともいいそえている。[8] これはひとつの事柄のふたつの顕現形態にすぎない。さきの童話のなかでも時間に重ねられていた母親のイメージ、そして彼の作品に頻出するアンティ・ムッター・コンプレックスのモチーフが、彼の生いたち(過去)に関係するのは想像にかたくないが、それは要するに現実原則の支配する抑圧の現実(過去)のトータルな拒否を意味する。それはとりもなおさず、人間の境域を抑圧から自由ないまひとつの世界に押し拡げることであり、無と呼ばれしかしけっして無ではない無の世界への出発を意味するであろう。

『没落』において被災者たちが越えた深淵のかなたの世界は、このような無の世界、無時間の世界であった。だがノサックはこのような世界をハンブルクの没落にはじめて発見したわけではなかった。むしろノサックは彼がほんらい帰属する深淵のかなたの無時間の世界を、被災者たちの姿に重ねみたというべきだろうと私は思う。

ところでこのようないまひとつの世界に帰属する人々の、現実にたちむかう態度はどのようなものか。『没落』は破局の現実に対処する被災者の心構えに結ばれていた……。ハンブルクの運命はもはやものの数ではない。それは、ハンブルク大空襲以来多くの都市がますます大規模に破壊され、しかも破局はまだ序の口で飢餓や悪疫が襲来し生き残れるのは四人に一人だろう、という文脈にまずおかれながら、しかしノサックはこう問いかえしていた。ハンブルクの運命がもはやものの数ではないのは、同情されねばならないのが、過去を喪失し、時間を離脱し、現在的になったわれわれではなくて、かえってまだ深淵をまえにし、昨日と明日とのあいだに締めつけられて一秒の現在ももたぬために深淵(破局)を乗り越える自信をもちえない彼らのほうだからではないのか、と。(あからさまにいえば、われわれが現在的になったがゆえに、われわれにとってハンブルクの悲劇はもはやものの数ではない、ということだろう)。そして時間(母親)

の命令に従いつつ死と遊ぶ子供の童話に転じたあと、「われわれはもっとも困難な事態をすでに経験した。もっと困難なことといってもものの数ではない。たいしたことではないのだ」と続けられていた。より困難な事態を予測しつつ、もっとも困難な事態をすでに経験したというのは論理の矛盾ではあるが、かえってハンブルク大空襲が被災者にとってひとつの決定的な経験だったことをよく表現している。と同時にこの言葉の背後には、われわれは現在的になった、時間から離脱したという命題が付着しているはずである。文脈からしてそうとらざるをえないだろう。苛酷な現実、酸鼻な破局をまえにして、なお「たいしたことではない」と呟くのは、いまひとつの世界に帰属する者にしてはじめて可能なことかもしれない。この呟きは、人生はくるがままに受容せざるをえないという意味の言葉とともに短篇集『死とのインタビュー』にたびたびみかけられるが、これらについては、その作品集について述べる次回に触れたいと思う。

最後に『没落』における、過去の喪失が抑圧の現実からの解放でなくて、逆に人間喪失につながる視点について一言しておきたい。ノサックは所有物としての事物でなく、客人として友人として遇した事物の喪失を悲しみ、その哀惜を、われわれの背後にあるもの、すなわち過去の夢からさめて、「私は人間だった」と告白して撲殺される男の童話ないし寓話に転調していた。この寓話のなかで文脈からすれば過去と当然呼ばれていいものを、ことさらに「われわれの背後にあるもの」といっているのは、ひとつにはノサックにとって過去という語がおおむね抑圧の現実を意味するからであろう。だが、ここでその喪失を悲しまれ忘却か告白かしか道はないといわれているのは、いうまでもなく、支配し支配しかえされる人間と事物との所有ないし被所有関係つまり抑圧の現実のことではなくて、人間と事物とのいわばオルフィックな関係つまり抑圧から自由ないまひとつの現実である。とするなら、この寓話にいう「われわれの背後にあるもの」つまりわれわれの失った過去とは、ハンブルク大空襲によって失われた客人としての事物を越えて、現実原則の確立以前の世界、無とも無時間ともいわれた世界、無意識とも呼びうる抑圧から自由な冥界を意味するとも読むことができるだろう。そのとき、背後世界を夢み、夢からさめて歌い、そして撲殺される男のイメージは、冥界に下降して地上に戻りけっきょくトラキアの女たちに八つ裂きにされる伶人オルペウスの運命に重なる。そしてまさにそのようなオルペウス像は短篇集『死とのインタビュー』の掉尾をかざる小品『オルペウスと

……』に定着されているのだが、それをもふくめてこの寓話を、現実の破綻のなかにかえって冥界とも呼びうるいまひとつの現実を歌う初期のノサックそのもののパラーベルとみることができるだろう。

ハンス・ゲールケはこの寓話を『没落』の機軸に据え、そこに報告されるすべてをこれの近似的ヴァリエイション[9]だといっているが、『没落』においては、くりかえしになるが、過去の喪失は抑圧からの解放を意味し、それが体験の報告の中心モチーフであり、失われたものへの哀惜は端的にいって事件の報告にかかわる副モチーフにすぎない。この寓話は、私にはむしろ、いま述べた意味で初期のノサック文学の境位をよく物語っているパラーベルとして印象に残る。そして直接作品に照らしてみても、それはオルペウス像に結晶しているばかりでなく、おそらくクリュタイムネーストラー・コンプレックスとあいまって、帰還することが死につながるアガメムノーンのモチーフの原像でもあるだろう（『カッサンドラー』、『死者へのたむけ』）。

ノサックは『没落』において現実世界の壊滅を報告するとともに、抑圧の現実の崩壊のなかにかえって抑圧から自由ないまひとつの世界を眺め、報告した。事件の報告として現実の没落（ウンターガング）を、体験の報告としていまひとつの現実つまり冥界への下降（ウンターガング）を書きとめた。むろん表題『没落』に、あるいはまた廃墟ハンブルクの酸鼻な経験を「冥界への下降」というときに、いまひとつの世界への下降という意味が託されているわけではない。にもかかわらず『没落』を構成するこの二面性を、より重要な後者の一面を見落としては、『没落』の理解を、ひいては『没落』を起点とするノサック文学の理解を偏頗なものにしてしまう。

たとえばヴァルター・ベーリヒは次のようにいう。「彼（ノサック）は深淵のむこう側でわれに帰った。彼は（『没落』を）書いた。『没落』を範型（モデル）として（以後の作品を）書いた。そこからのちの作品に無数の糸が延びているのだ。彼は現在的になったのだった。彼は没落の、死者の世界の、ありえないものの描写家でありつづけた。生き残った者でありつづけた。彼は批評がいうようにニヒリストになったのではない。なぜなら……破壊および破壊的なものが自己目的となってはいないからだ」[10]。ベーリヒもまたここでは『没落』を事件の報告としか見ていないようだ。以後の作品においてノサックが没落の、死者の世界の、ありえないもの（ノサックはハンブルクの廃墟をこう形容した）の描写家でありつづけたという評語は、ニヒリストになったのではない、破壊的な

ものが自己目的になっていないという補足説明からみて、事件の報告の一面において、つまり事実のレベルでそういわれているはずである。したがって現在的になったという文章も、現在の現実を直視するようになったというほどの意味にしかとられていないのだろう。しかし以後の作品は『没落』の体験の報告を継承する。ベーリヒの評語は、ノサックの体験世界に、いまひとつの現実に飜転させるとき的確な評語となるだろう。すなわち、没落はすでに述べたような意味での冥界への下降を、死者の世界はまさにそのような冥界を、そして生き残った者とは現実の破局のあとにこそいまひとつの現実に生を持続する者を意味するのだ、と。ノサックは『没落』のなかに、ふたつの現実が同一の言語を用いるためのすれちがいを語っていた。『没落』にはそのふたつの現実に対応する事件の報告と体験の報告との二面がある。事件の報告の語彙を、体験の報告を継承するのちの作品につなぐためには、いったん体験世界での意味に飜訳しておく必要がある、と私は思うのだ（『死とのインタビュー』という短篇集の表題にもこの二面性を読みとるべきだろう）。

ベーリヒがその所論において、ノサックの幻想世界を見逃しているわけではない。だれの目にもノサックの幻想性はあきらかであり、これに言及しない論者はいない。しかし肝心なところでそれが捨象されてしまうことを、あるいはすり落ちてしまうことを、私はいいたいのだ。最初に引用したライヒ＝ラニッキにしても『醒めた幻想家』という表題でノサックを論じている。にもかかわらず「現在的」という『没落』全篇によって定義された語彙に誤解を生ずるのは、作品の、語彙の外見のみを見て、ノサックの世界を内側から把握する態度に欠けているからなのだろうか。

「現在的」という語彙は『没落』を紹介することで定義しえたつもりだが、端的にいえば、われわれの現実において anwesend（いまここに在る）と同義のはずのものが、『没落』のなかではいまひとつの現実とのかかわりにおいてむしろその反意語なのだ。われわれは現在的になった、とノサックはいう。そして『没落』の別の個所では『没落』そのものを、われわれがもはやanwesendなもの（いまここにいるもの）ではなくなったことの寛恕の願いだろうかと書いているのだ。anwesend の反意語としての gegenwärtig。こうした用法を恣意にすぎるとも私は思わない。なぜなら、アランがどこかで時間は哲学者の試金石だといっていたが、そしてノサックはけっして時間論を展開しているわけでもなんでもないけれ

ども、少し乱暴にいうなら、時間にかかわる名詞はそれを使用する者の数だけ多義であっても不思議はないからである。

テキスト

Hans Erich Nossack, *Der Untergang*, edition suhrkamp 19, 1967.

Ders., *Interview mit dem Tode*, Band 117 der Bibliothek Suhrkamp, 1966.

Ders., *Nekyia・Bericht eines Überlebenden*, Band 72 der Bibliothek Suhrkamp, 1964.

注

1 H. E. Nossack, *Nach dem Letzten Aufstand*, Suhrkamp, 1961, S. 18.

2 Marcel Reich=Ranicki, *Hans Erich Nossack・Der Nüchterne Visionär*. In: *Deutsche Literatur in West und Ost*, Piper, 1963, S. 20f.

3 H.E. Nossack, *Über den Einsatz*. In: *Die Schwache Position der Literatur*, edition suhrkamp 156, 1966, S. 49.

4 H・トルクーゼ『エロス的文明』（南博訳、紀伊国屋書店、一九五八）に多くの教示をえた。

5 H. E. Nossack, *Spätestens im November*, Suhrkamp, 1956, S. 56.

6 H.E. Nossack, *Bitte kein literarisches Geschwätz*. In: *Über Hans Erick Nossack*, hrsg. v. Christof Schmid, edition suhrkamp 406, 1970, S. 15.

7 Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften* VII, Teubner・Vandenhoeck & Ruprecht, 1958, S. 196.

8 Horst Bienek, *Hans Erich Nossack*. In: *Werkstattgespräche mit Schriftstellern*, dtv 291, 1965, S. 95.

9 Hans Goerke, *Der Untergang*. In: *Der Deutschunterricht* 15, 1963, H. 3, S. 61.

10 Walter Boehlich, *Nachwort*. Zu: H. E. Nossack, *Der Untergang*, edition suhrkamp 19, 1967, S. 84.